

中西是助撰

# 一刀流兵法韜袍起源

高崎 津田明啓蔵梓



〔第十講〕

## 中西是助

# 『一刀流兵法韜袍起源』

はじめに 今回は、近世の中ごろ、今日の剣道の原型ともいうべき、竹刀

打込稽古の方式を唱導し、ひろく時代に定着させるのに大きな役割を演じた一刀流中西派の四代、中西是助(忠兵衛子武)が文政五年(一八二二)に撰したという旧稿を、文久元年(一八六一)六月、上州高崎藩士津田明啓が出版した『一刀流兵法韜袍起源』という一書を紹介することとする。

ご存じのように、近世初頭に成立した流派剣術は、勢法(形)・組太刀による稽古方式をとったが、泰平の時代の流れとともに、いわゆる華法剣術に随して、本来の意味・目的を見失ってしまった。こうした形(型)中心の稽古方式の欠陥を補填し、理業を合致させる一方法として考案されたのが、面・籠手・挽による打合稽古で、その先駆となったのは、享保年間、長沼四郎左衛門國郷の直心影流であった。この方式は徳川吉宗の享保改革という時代の要求を反映して、次第に人々の関心を集めていったが、これをさらに大きく飛躍、前進させたのが、宝暦年間、鉄面・胸当(胸)などの防具に改良を加え、「刃引・木刀を以て稽古し、位、構、長短、間尺を置り、敵刃の我に中らぬことを修業し、心氣を練る工夫をする」という一刀流の本則を破って、竹刀による打込・試合稽古方法を採用し、一刀流韜袍(韜はシナイ、袍はコテの意)を唱導した、中西二代、中西忠蔵子武であった。

たのである。

本書は、この一刀流韜袍の成立過程と、一刀流の本則である組太刀修行との問題点を明らかにするうえで、まさに好箇の資料であるとともに、現代剣道のあり方についても、示唆するところが多いと思われる。筆者の是助は、三代忠太子啓の甥で、初め久馬、のち猪太郎、通称是助、享和元年(一八〇二)三月、子啓が四十七歳で夭死し、四代目をついで忠兵衛子正と名乗った。幼少より剣の素質にすぐれ、「韜袍比較精蘊、先の数世に喩ゆ」といわれ、また組太刀では寺田五郎右衛門宗有を師として修業の功を怠らず、遂に大成して、よく小野派の正脈を支持し、(山田次朗吉「日本剣道史」)弘前藩に招かれている。また一門を統率しては、浅利又七郎義信・千葉周作成政・高野佐吉郎苗正・中沢源造・藤田三郎兵衛直方らを輩出し、その道場(下谷練堀小路東側)は、間口六間、奥行十二間、破風造りの玄關をもつ、当時江戸第一の大道場とうたわれた。文政七年(一八二四)七月二十日没、谷中の善性寺(日蓮宗、荒川区東日暮里五十四)に葬る。法号、如法院信行日解居士。

なお、是助の組太刀の師であった寺田宗有については、参考として付載した白井亨(義謙)の「兵法道志留辺」(抄)に詳しい。本書を板行した津

田明鑿は、高崎藩師範であつた宗有（天真翁）の門弟で、宗有の死後（文政八年）は白井亭に師事し、天真一刀流を継承した。彼はまた、軍学などにも長じ、「慶元軍要録」他の著述があり、文武兼備の士であつた。元治元年（一八六四）没。（下島権一「上毛剣客史」昭和33）

本書の原本は、慶応義塾図書館の蔵本に拠つた。閲覧を許された同館の好意をあつく感謝する。

中西忠蔵の竹刀勝負観 前述のように、一刀流にはじめて竹刀試合稽古を導入したのは、中西道場二代、忠蔵子武であるが、本文では「抑、中西家ニテ、シナヘ打台初リシ濫觴ハ、宝暦年中ノ比、忠太先生ノ弟子ニテ、五代目ノ忠方先生ニ至テ皆傳ノ御人也。」として、その人の姓名はほかしてあ

## 一刀流兵法韜袍起源考

中西是助撰

夫一刀流兵法ハ壯士劔ヲ以テ道ヲ脩スルノ法ニシテ敵ヲ治ルノ理ナリ然モ一刀流ト名ツクルモノ躰ヲ心性ニカタトリ用ヲ進退ニ形ナス故ニ無心ナル所ヲ以テ假リ一刀ニ去リ無為無心ノ躰ヨリ敵ノ業ニ随テ太刀ハ自然ニ働クナリ當流兵法ニ敵ニ勝ツコトヲ修行セス專ラ我ニ當ラス丁ヲ慥カニ知レ

る。たまたま本稿のために、笹森順造先生の名著「一刀流極意」（昭和40）を一読していたところ、最後の部分に、創始者としての忠蔵の竹刀勝負観をみるうえに得難い資料が収録されているので、紹介しておこう。

小野派一刀流の傳系のうえに、津輕藩（弘前）の占める位置はきわめて大きく、津輕四代の藩主信政は一刀流を小野次郎右衛門忠於に学んで極意に達し、五代藩主信寿は同じく忠於について妙奥を極め、忠一から一刀流の正統を継いで、以来代々の藩主がこれを学んだので、江戸在府ならびに在藩の士の間には一刀流がにわかに勃興し、傑出した達人が続出したという。（同書、第一編追統）

こうした津輕藩に山鹿流軍学の師範として招かれた興信（素行の養子）三代の孫八郎左衛門高美もまた、小野次郎右衛門忠喜から皆傳を受け、多数の門弟を養つたという。この山鹿高美が安永四年（一七七五）十二月、実兵学者の立場から一刀流剣術の現状に関する得失論を十一ヶ条にまとめ、この意見書を中西忠蔵に宛てて送つたのである。（当時、高美は三十歳）

これをうけた忠蔵は、高美の熱意に感心はしたものの、「しない打」に関する一ヶ条だけは、到底これを看過することができなかったらしく、他の十ヶ条については何ら意見をつけず、「しないの箇条計愚案申述候」と翌年正月三日付で返書を書き送っている。この箇条は、木刀の勝負と竹刀の得失を、師の小野忠喜に問うた時の、師の返答として「木刀は敵の氣に當つて後に勝を制す。竹刀は躰へ當つて而して後勝を制す。然れば、竹刀は又竹刀にて仕合存分打合うて、其自得有る事なり。別して竹刀は業を存分軽く、譬へば子供の遊の如くにし、勝負の処を深く思う事を嫌うて、事可ならん」という意見であつたといふのである。

この小野宗家の意見、特に後段の「しないは心を留めず、童の遊の如くして可ならんとの事」（忠蔵返書）は、竹刀打込稽古によつて一刀流に新生面をうちたてようとする忠蔵の意図を無視し曲解しようとするもので、とても承服できるものではなかつたのであろう。左に忠蔵の加筆（反論）の

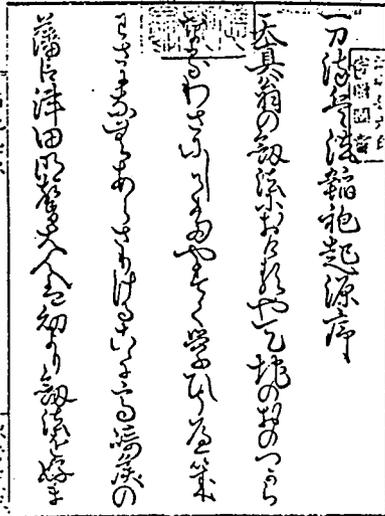
全文を再録しておこう。

愚案するに、刃引・木刀は、人々身を捨て、打つ事難き故、巧者成る者に勝多く有、之物なり。しなはれは面具足にて打相い、微弱なるもの又は兼に未熟の人も、身を捨て相打て懸る心になり、恐るゝ心薄き故、勝負分り兼候也。依て元師より、しなはれは乱に取扱不、致様に蓄文状にも有、之候。乍、去刃引木刀ばかりにては、強く打相こゝろみ難き事多有、之、末々に至り、業弱く氣相の論、或は禪言を用、剣術の物語に沈む物なり。木刀しなを離れて外に論はなき事と被、存候。氣相の事はかりに成り候と、太刀先、口先にて欺き勝様になり候。又面具足の仕合ばかりにては、小手に

# 一刀流兵法韜袍起源

中西是助撰

(以上)



## 一刀流兵法韜袍起源序

天真翁の劔法におけるや、天地のおのづからなるわざにして、たやすく学びうべきわざになむあらざりける。こゝに高崎侯の藩臣津田明鑿大人は、幼より劔法を好まれ、其業を天真翁に学れしが、翁身まかられし後は、我白井先生に随て、つひに二翁の妙所を窺ひしり、其技あるよりもこく、水よりもひやゝかならんとは、周く世の人の知所也。さればこたび君侯の命によりて、同藩の人々に其技を教授せらる。しかあるに、人々翁の術の真を知る事すくなく、韜袍比較の技を旨とせる人多かれば、此一巻を梓にのぼせて示し給へど、おのれ切にすゝめまゐらせて、かくはものし給へるなり。弘前の藩臣中西是助ぬしの編集せられし書にて、翁の弟子小澤市右衛門主の年頃もたりしを、明鑿大人に譲られしにぞ有ける。我幼より白井先生に随て劔法を学びしにより、大人ともまじはり深し。先生う

(註)

二翁 寺田宗有(天真翁)と白井亨(義謙)。

旨とせる人 一刀流の本旨本則であると考え

ている人。

梓にのほせて 梓は版木。書物として出版すること。

さとしをうくる身 教授をうける者、門弟。

敵ヲ治ル 敵を制する。

躰 本体、本性。

用 作用、はたらき。

功熟し 経験熟達して。

切組 組太刀。勢法（カタ）。

曲尺合 「是ハ我躰ニ随ヒ、太刀ノ長短輕重ヲ考ヘ、敵ト立合ノ時ハ、初ノ一足ヲ規矩ニ致シ、我が身体ト太刀ト手足心氣一致ニシテ法度ニ叶フヲ曲尺合ト云也。」（一刀流中西派傳書）

合氣 相氣。相手と対々の氣になること。

竹具足 竹製の胸当、胴。

シナヘ打シタリトテ…… 「シナイ打趣意、

是ハ初一兩年ノ間ハ、善惡勝負ニ不拘、身體偏曲ナク、我が身躰手足心ノ及ブ丈ケハ骨ヲ折リ、打込々々無滞、烈シク細キ所マデ延ノ自然ニ出業ノロナル事ヲ專一ト修行スル也。然ル時ハ強ミニ付、業ニコリナク、屈伸自在ニナリ、敵ノ打出ス可キ太刀モ見ヘ、己ガ可打込場モ知レ、受留モ己ト出ル也。仍テハ、組ヲ以テ勝負合ノ業ヲ考、斯シテ數遍動ル時ハ、心氣ニ邪惡ノ疑ヒナク、業ニ扁曲ナク、コリナクシテ、自然一刀ノ趣意ニ叶ヘ

せられし後は、うしに刃法のことども問まゐらせて、さとしをうくる身にしあれば、いさゝか其故よしを書しるすになむ。

文久のはじめの年水無月

日下部 房元（花押）

小林 千風書

## 一刀流兵法韜袍起源考

夫一刀流兵法ハ、壯士劔ヲ以テ道ヲ脩スルノ法ニシテ、敵ヲ治ルノ理ナリ。然モ一刀流ト名ヅクルモノ、躰ヲ心性ニカタドリ、用ヲ進退ニ形チス。故ニ無心ナル所ヲ以テ、假リニ一刀トモ云リ。無為無心ノ躰ヨリ、敵ノ業ニ随テ太刀ハ自然ニ働クナリ。当流兵法ニ、敵ニ勝ツコトヲ修行セズ、専ラ我ニ当ラヌ事ヲ慥カニ知レバ、敵ニ勝ツ事ハ自ラ其中ニ備ル也。常ノ修行鍛練功熟シ、我ニ当ラヌコトヲ知ラバ、敵ノ位、太刀ノ構、長短間合ノ遠近ニ應ジテ勝ツ事ハ自由ナルベシ。是ヲ修行スルニ、初ニ切組ヲ習ヒ、次ニ曲尺合ヲ習ヒ、其後ニ心氣ヲ煉テ本心ヲ知り、漸々ニ一刀ノ意ニ叶フコトヲ知ルナリト雖モ、サノミ難キニアラズ、亦易キアラズ。其人ノ志ニアルノミ。然ルニ敵ニ向フト、合氣ニナリ、負ケマシ勝ント相互ニ勝負氣計リ修行シテハ、終身勤苦シテモ、兵法得ル事ハ難カルベシ。

今世ニ一刀流ト称スル兵法遣ヒヲ見ルニ、多クシナヘヲ持、鉄面ヲ掛、竹具足ヲ用キ、互ニ合氣ヲ用キテ、我打レマシ敵ヲバ打ント志シテ、日々ニ打合テ大汗ヲ流ス者ヲビタシ。是一刀流ノ名ノミニシテ、一刀流ニアラズ。斯クハ云ヘドモ、当流ノ心氣ヲ少シク得タルノ後ハ、シナヘ打シタリトテ法度ニハナケレドモ、唯無益ノコトナリ。抑モ中西家ニテ、シナヘ打合初リシ濫觴ハ、宝曆年中ノ比、忠太先生ノ弟子ニテ、五代目ノ忠方先生ニ

リ。」(中西派傳書)

心氣ノ事ニ於テヲヤ「夫兵法ハ所作ヲ第一トストイヘドモ、全勝ヲ得ル事カダシ。遅ニシテ勝ニアラズ、速ニシテ勝ニアラズ、柔ニシテ勝ニアラズ、剛ニシテ勝ニアラズ、敵ノ機ヲ察スル事肝要也。兵法ニ四ノ病アリ。驚、懼、疑、惑ト云。此病一ツ有者ハ、勝ツ事アタハズ。此病ヲ除キ、心広ク体胖<sup>ユキ</sup>ニシテ、湛寂活脱、思ト慮ヲ絶シ、無ニ分別ニ地ニ至リ、全勝ヲ得ル也。如<sup>ス</sup>斯ヲ神明劍トモ極一刀トモ云ナリ。死生有<sup>レ</sup>命、進テ死スルヲ榮トナシ、退テ生ヲ恥トスト、古人ノ辞アリ。二六時中無<sup>ニ</sup>油断<sup>ニ</sup>修行シタマフベシ。」(中西子正先生機運書)

架 一刀流の構の基本として、架九品、すなわち、陰・陽・正眼・上段・下段・本寛・覆・脇構・隠剣の九つがある。

フタ分ケニ成テ 二つの組に分けて。荒増 大概。

心氣平ニシテ常ナレバ「心ヲ体一バイニ満チ、手足ノ働マデ住<sup>ル</sup>マル事ナク、魚ノ水ニアソブガ如ク心ヲ持ベキ也。タルム時ハ勝ヲ残シ心氣ノユルム故、敵ニ追込<sup>ル</sup>ラル、也。敵ノ打太刀ハ鏡ニウツル如ク、我体ニアル心鏡ニウツラバ、ヲノガ心ヲノツカラ心合<sup>ハ</sup>之事、タトヘバ打太刀ニテモ氣ノ抜ヌ所ハ、一ヨリ十二切ル時ハ、モトニカヘラズバ不<sup>レ</sup>叶義也。然

至テ皆傳ノ御人也。忠方先生死去ノ後ハ、小野派ニ上手名人ト呼バルム人ハ、忠太先生一人ニテ、誠ニ高名也。依テ諸家ヘ召サレテ、朝ハ未明ニ出デテ夜ニ入テカヘラレ、徒弟ノ教示<sup>シ</sup>心底<sup>ニ</sup>任セラレズ。又諸家ヘ出ラレテモ、家中ノ士ノ相手稽古ハ教モ行届カズ。上タル方ニハ格別ノ達人ニナラレシモ有リシカドモ、下々ニ至テハ流義ノ真意ヲ得タル者一人モナシ。況ヤ組ノ深意、曲尺合、心氣ノ事ニ於テヲヤ。唯日々何モシラズ、古ク遺フ者ガ新規ノ者ヲ取立<sup>ル</sup>ルノミニテ、組ノ形<sup>チ</sup>ノミ覺エテ、数日数遍ヲカケテ遣ヒ堅メテ、兵法ノ道ハ取失ヒタリ。

然シテ二代目中西忠藏先生ニ至リ、又弟子少ナカラズ。弥稽古<sup>イヨイ</sup>出精ノモノ多シ。先生ソノ稽古ヲ見ザルムニ、誠ニ流義ノ意味モナク、形<sup>カク</sup>ノミ重ネツカヒ堅メテ、肝要勝負ニ遠ク、カヘツテ素人ニハオトル事ナレバ、夫ヨリハ、面小手ヲ掛テ、シナヘヲ持、面々ノ心次第打合セタル方、カヘツテ架、形チノホグレトモナリ、未熟ノ兵法遣ヒノ相手位ハ成ベント、發明セラレテ初テ見ラレタルナレドモ、何モ教エズ深意モ知ラズ遣フテ居タモノナレバ、面白キ先生ノ御工夫ナリ、是ニテコソ劍術ナリト思キ込、我モ我モト面小手シナヘヲ用意シテ、是ヲ出精スルコト盛ンナリ。故ニ先生眉ヲヒソメテ曰ク、此中へ本明<sup>カクイ</sup>ノ位ニ至ル所ノ真意ヲ申出シ導ントスルトモ、中々得ル者一人モ有ベカラス。折節其中ニモ不審ヲ立、組ヲツカフ穿鑿ヲシテ脩行ニ志ス人モ希<sup>レ</sup>ニ有故、志シ有ルモノニハ組ヲ教、シナヘヲ好ム者ニハシナヘヲ遣ハセテ、弟子ヲフタ分ケ<sup>ツ</sup>ニ成テ稽古セシナリ。其中ニ両ヤウトモニ稽古スルモノモ有リケリ。

借、中西忠太子啓先生ニ至リ弥盛ナリシガ、借哉、享和元辛酉年中春、病ニシテ逝キヌ。然ルニ古忠太先生ノ門弟ニテ、寺田五右衛門宗<sup>ムネノリ</sup>有一人ハ、真術ニ志深ク妙處ニ至リテ居ラ

レバ流儀ノ心合ト云事ハ、八九ノ間ニ居テ、上ルトナク下ルトナク、自由自在ニシテ、天地一パイニヒトシキ如シ。一切事ハ強ク切ルトセバ、心ニヌケル所アリ。此技ル所ヲ知テ切ル時ハ、心ノ切ニテ強キ事甚シキ也。切ハ心ニテ切り、心ニテ不切ト知ルベキ也。別・不別ト云事アリ、敵ニ心別ル、時ハ、心ハナサレズ。歌ニ、

とり得ては心離れず捨置くを敵に心のあらん限りは。

切る太刀は心留らば切がたし 心の切に墨曲尺はなし。

太刀は太刀 性にまかせて敵を切れ 切ると思はゞ我に留れり。(中西子定先生口傳之寫)

卍字ノ曲尺 「万字最高の徳は天地渾円に吻合して、打合をまどかにすることである。万字の横の一線は無限大の水平線で、地の静かな陰の象をなし、縦の一線は無限大の垂直線であつて、天の盛んな陽の象を示す。縦横、陰陽、上下が相交つて十字の象を成し、その四端に各々一を加えて描くと万字になる……」(笹森順造「一刀流極意」)

卍字ノ曲尺 七十歳。

息シテ 嘆息して、なげいて。

谷神傳平常無敵流 山城の人、池田八左衛門成春、はじめ一刀流、新陰流を学び、のち

レシ故、子啓先生没後ハ寺田氏ニ学ブ事年アリ。予中西家ノ名ヲ継トイヘドモ、其術更ニ及バズ。家名ヲ汚サン事ヲ恐テ、改メ励ムノ思ヲ起シ、依テ寺田氏ニ謁シテ、予愚盲ヲ忘レテ就テ深意ヲ学バント請フ。寺田氏吾ガ言ヲ可トシ、サラバ御流義ノ荒増ヲ語ラン、夫レ一刀流ハ傳書数多有リト雖モ、書ヲ見レバ其書ニ泥ミ、業ノ名劔ヲ習ヘバ名劔ニ泥ミ、本意ヲ失フ。故ニ兵法ハ專一ニ人ニ勝ツ業ヲ成ストイヘドモ、全ク修行ニ勝ツ事ヲツトメ行フニ非ズ。変ニ臨デ、生死ヲ明ニスル術ナリ。生死ノ理ニ通徹シ、心ニ偏曲ナク、疑ヒナク惑ヒナク、思慮分別ヲ用キズ、心氣平ニシテ常ナレバ、変ニラフズル事自在ナルベシ。此心僅ニ物アル時ハ、形チ出来ル。形チ有ル時ハ、敵アリ。我有テ、相對シテ争ヒナリ。心クラミテ靈明ヲ失ナフ。故ニ明ラカニ勝負ヲ決スルコトナラズ。一刀流ノ本理ニアラズ。此上ノ所ハ長ク語リテモ詮ナシ、業ニ掛テ申スベシ。活人劔・殺人刀モ、真ノ真劔、卍字ノ曲尺モ、其外太切ナル傳受モ、知りタルダケハ教フベシ。古書ヤ傳書ヲ御所持ナラバ、文字ニヲロカナリ、其書ヲソコニテ讀ムベシ。其理ヲ直ニ業ヲ以テ告ゲン。吾、齡七旬ニ近シ。風前ノ一燈、豈二三子ニ陰ス事アランヤ。子怠ラズ学バルベシト。於レ是ニ其ノ意ニ感服ス。近来、一刀流ノ真意ヲ取違ヘ居ル者少ナカラズ。是ヲ息シテ、寺田先生ノ語ヲ其儘ニ書綴リ、一小冊トス。不文ハ論ズル所ニ非ズ。尚、益者ヲ俟ノミ。

文政五歳壬午某月某日

中西是助稿

一刀流韜袍起源跋

粵ニ寺田五右衛門宗有先生、人となり寛裕にして、膽力人にすぐれたり。劍法を嗜み、はじめ中西子武に従ひ学びて、韜袍較力の術、真理にあらざるを悟り、よりてこゝを辞し、

無敵流二代岡野清太夫に就いて禪的剣法を得、さらに老子の谷神章(第六)の真言と合致するを説いて、谷神傳平常無敵流と称した。針ヶ谷夕雲 無住心剣術の祖。通称五郎左衛門、名は正成。小笠原源信斎(真新陰流)に学び、晩年は本郷駒込竜光寺の虎伯和尚に歸依し、畜生兵法を排して、無住心剣を唱えた。私利私欲を離れ、柔和、無拍子の刀法で、相抜けを最上とし、師と試合して相抜けとなれば皆伝とし、真面目と称する印可を与えた。寛文二年(一六六二)没、七十歳。門人に小出切一雲らがある。

小田切一雲 傳書では小出切。もと長谷川忍庵。半井驥庵塾の学頭を勤めたといひ、二十八歳の時から夕雲の口授をうけ、三十四歳のとき師と試合して三たび相抜けとなり、印可を得た。「夕雲先生剣法書」などの著述をもって、師の柔和剣法の哲理を普及した。六十歳で出家して空鈍と号し、増上寺近傍の御掃除町に住居し、筆剣の二芸を生涯の楽しみとした。宝永三年(一六九〇)没、七十七歳。門人に真里谷四郎義旭(真里谷流)、宇野小軒、井島巨養(雲弘流)らがある。

金子夢幻 法心流の祖。通称弥次右衛門、名は範任。越後高田侯の臣、はじめ同藩の親流を学び、ついで諸流を修めて、寛文十一年(一六七二)一流を開く。宝永元年(一七〇四)

谷神傳平常無敵流を池田成美に学ぶ事十二年。其術短刀を執り、吾神氣を修め、敵人の大刀長剣の猛鋭を挫くを主とし、其妙を極む。大圓君の命ありて、再び一刀流に帰す。世々此流を主とするを以ての故也。古人針ヶ谷夕雲、小田切一雲、金子夢幻、皆剣法精妙を究む。翁其遺書を熟復し、又冬嶺和尚に参禅して鍊丹法を受け、之を剣法に活用す。こゝにおいて、吾に敵するもの、自然に畏縮し、正しく其面を見る事あたはず。況奮撃するをや。和尚感歎して云、是天真を得たりとて、天真翁と称す。是乃当流天真傳の起源也。其衣鉢を傳へ、嫡流を得るものは、白井義謙子也。子も初中西子啓に学び、箱袍比較に長じ、諸州を歴遊して敵手なく、終に備藩に至り、一國の師となれども、猶自慊とせず、江戸に帰り、寺田翁の確論を了解し、深く箱袍比較の益なきを悟り、翁に隨身して益其閫奥を極む。此人ありて、翁天真の妙術、人間に傳ふる事を得たり。愚亦翁の徒弟、翁没後、白井子に従遊し、其旨趣を窺ふ。翁の術、天下獨歩と称すべくして、其人質訥、天真の機を自得すといへども、教ふるに言語を用ひず。故に敏悟の人に非れば、楷梯無くして高きに登る如し。弟子無教にして、中道にして廃する者多きは、これが為也。白井子其道を得て、又工夫を尽し、更に四肢を乗るの法を發明せり。其初、浪華に祇役する日、白井子後來の修法を問ふ。翁曰、徳本行者に参じ、佛名を唱ふべし。此外余法なしと。子、其教を奉じ、日に道場に赴く。一日、行者擊鉦撞木の躰を見るに、手動かずして天機一躰、自然活動の妙あり。子、釋然心に自得し、舎に返り木剣を把り、行者撞木の意を以て試みしに、意外不可思議の機を得たり。蓋此法と鋒前に赫機を摩すると四躰を和らぐると、此三法、子の自得にして、古人未発の玄訣なり。あゝ、寺田翁既に下世す。白井子も亦長逝せり。愚、二師の良法妙術世に傳はらざらん事をおそる。此ころ弟子、世間流行の箱袍比較の起りを問

越後村上で死んだ。

冬嶺和尚 東嶺(一七二一—一七九二)。白隠の高弟で、江戸至道庵に住し、のち伊豆北山村(三島市内)の龍潭寺を開いた。近江国神崎の人で、俗姓佐々木、九歳の時得度し、十七歳のとき出遊、寛保三年(一七四二)はじめて白隠に謁し、苦修積年、ついにその衣法を授けられた。寛政四年没、七十二歳。

浪華に砥投する 文化十二年、大坂城代として赴任する藩主松平右京大夫輝延の夫人の旅中衛護役を勤めた。

兵法未知志留辺 「此書は家流兵法の傳書、明道論なる者の註釈にして、上下二巻あり。

上巻は此兵法流名の起りし処、並に其大意を述べ、又先師宗有の修法を略記し、余幼より数十年の光陰を費し、既に生涯を錯らんとせし事を著し、終りに鶴林祖翁以来の相傳練丹の法を修して、天眞の氣を養ふ時は、兵法無二の捷徑なる事を論じ、余が流初学の人をして惑はざらしめ、余が如き無益の艱辛無からしめん事を要とす。」(同書、凡例)

なお、本書の全文は、山田次朗吉「剣道叢書」(昭和11)、綿谷雪「稀本叢刊第一巻、古武道文献集」(昭和44)に収録されている。また富永半次郎「剣道における道」(昭和19)に解題的な論考を載せているので、あわせて参考されたい。

ふ。故に、中西是助の書しを刻して、弟子に授く。是に於て、翁の術の大概と白井子の傳とを記し、鞞袍比較の術は一刀流にあらざる證を跋文に書記す。二師の奇節偉行の如きは、他日真傳に詳載すべしといふ。

文久元年辛酉六月

後学高崎 津田明馨謹識

### 〔参考〕白井亨著 『兵法未知志留辺』卷之上(抄)

兵ハ兵器ノ惣名ニシテ、此ヲ執ヲ兵士ト云。

法ハ法则ナリ。古昔劔術ト云ハズ、兵法ト號ク。

元祖一刀齋景久ヨリ今ニ至テ兵法ト云者ハ、其古ニ從ヘバナリ。今此兵法ハ、劔ノ一術ニ限ルベカラズ。練丹シテ真空ヲ擬シ、天眞ヲ感得スルナレバ、實ニ諸道ノ根元、教ノ源ニシテ、武夫先務トシ、修スベキノ法ナリ。余ガ傳ルノ書ヲ別傳ト称スル者ハ、先師ヨリ傳ルニアラズンテ、愚ガ記スル書ナレバ也。

天眞傳兵法トハ、天眞ハ大極本然ノ一氣、兵法ニ於テ天眞ヲ養テ純ニスル術ヲ傳ルガ故ニ、天眞傳ト号クルナリ。先師宗有幼ニシテ中西子定ニ其術ヲ学ブ。子定死シ、其子中西子武ニ至リ、勢法ヲ以テ道ヲ傳ル事ヲ迂ナリトシ、今天下流布ノ鞞袍比較ヲ捷徑ナリトスルニ至リ、先師(宗有)意ヘラク、是真理ニ違ヘリトテ、其師子武

ニ辭シテ他門ニ走り、谷神傳平常無敵流ヲ池田

某ニ学ブト十二年、終ニ許可シテ其宗ヲ得タ

リ。時ニ寛政ノ初メ、其君侯ノ命ヲ蒙リ、池田某ヲ辭シ、中西子啓ニ帰隨シテ一刀流ヲ学ビ、寛政十二年(庚申)年九月十有三日許可シ、又其宗ヲ得。明年子啓死ス二月十七日、時ニ年四十七歳。其子子正書傳ヲ先師(宗有)ニ受テ、其道統ヲ継グ。先師尚神ヲ擬シテ止マズ。

又昔年、針ヶ谷夕雲・小田切一雲・金子夢幻・山内蓮心等ノ遺書アリ。各、兵法ニ於テ微妙ヲ得テ、其所得ヲ述タルハ天下人ナキガ如シトイヘドモ、其書各練丹ノ事ヲ論ゼズ。此レ、其人敏ニシテ、暗ニ其妙ヲ得シ者ナリ。其書真理ニ通ズトイヘドモ、練丹ノ法ナクシテ階梯ナキガ故ニ、空理ニ均シ。譬バ、苟不固ニ聡明聖知達ニ天徳ニ者、其孰能知レシ之ト云ガ如キハ、

真空 「書中真空と稱する者は、先師宗有の心氣と稱する者にして、八丈四維、空機の擬実する者を云ふ」(同、凡例)  
其宗を得 免許皆傳をうけた。

其君侯 高崎藩主、松平右京大夫輝和。  
書傳 一刀流傳書の謄寫。

山内蓮心 蓮真。八流斎といい、平常無敵流の祖。岡山の産といい、少年から剣を学び、多賀伯庵に富田流を習い、のち諸国を修行して京都に上り、熊沢蕃山、僧白巖らと交遊をもち、心要を練って遂に無我無敵も悟り、寛文二年(一六六二)無敵流を稱す。

各練丹の事を論ぜず 「右四人各名人なりと雖も、殊に一雲は古今独歩とす。一雲死して後、五年を経て、宝永七庚寅、白隠禪師始て練丹の術を白川の白幽仙人に学ぶ。此れ近世へ傳るの創めなり」(同書、註)

參玄練丹に神を凝し 「參玄の土兩三輩を得て、内觀と參禪と共に合せ並べ」形を練るの要、外氣をして丹田氣海の間に凝らしむるにあり。神凝る則は氣聚る。氣聚る則は、即ち真丹成る。丹成る則は形固し。形固き則は神全し。神全き則は壽し。」(白隠「夜船閑話」序)

練丹自強 養心(氣力)養生(体力)の法。見性得悟 人々本具の心性(佛性)を徹見して、悟りを得ること。

余ガ如キノ至愚、何ヲ抛トシテ何ヲカ修センヤ。然リトイヘドモ、先師其遺著ニ參ジテ其真ヲ得タリ。又、沙門東嶺ナル者ヲ師トシテ、參女練丹ニ神ヲ凝シ、大誓願ヲ発シ、或ハ數日断食水浴シテ其真ヲ極メントスル者數次、或ハ灌水ノ法ヲ修シ水浴二三箇ニ至ル事數十年、壮

ヨリ八旬ニ至ル迄、練丹自強スル事夙夜懈ル事ナク、終ニ一旦豁然トシテ見性得悟ノ大事ヲ究メ、佛祖不傳ノ妙、其天真ニ貫通スル事ヲ得タリ。中頃、東嶺先師(有宗)ニ言テ曰ク、子方道業真ヲ得、又壽ヲ得ベシ。実ニ天真ヲ得ルノ翁ナリトテ、天真翁宗有ト號ク。今此兵法、天真翁ノ傳ヘシ所ナリ。故ニ又、天真傳ト号ク。東嶺、

道ヲ鶴林先師ニ受ケ、鶴林先師道ヲ信中ノ正受老漢ニ受ケ、又練丹ノ術ヲ城州白川ノ白幽仙人ニ受ク。鶴林先師練丹ノ法ヲ得テ修スル事數年ニシテ、佛祖深遠真正ノ奥義ヲ徹見シ了リ、絶代ノ功ヲ成セリ。先師(有宗)鶴林先師ヲ祖トシ、東嶺ヲ父トシ、能ク其法ヲ持テ天真ヲ全ス。鶴林先師常ニ云ク、此法五百年來断絶スト。嗚呼鶴

林先師ナクンバ、此法何ゾ起ラン。東嶺ナクンバ、此法何ゾ存セン。先師(有宗)ナクンバ、何ゾ此法ヲ兵法ニ加フル事ヲ得ンヤ。先師人トナリ、雄大雄偉、骨肉堅実、力數百斤ヲ重シトセズ、事ニ臨ンデ死ヲ怖ルム事ヲ知ラズ、尚福氣ノ相アツテ、精神力貌兼収ム。假令參玄練丹ノ功ナリトイヘドモ、赤身ニシテ英豪トセンカ。庸夫

斯ノ如キノ健雄美貌ヲ具セバ、其勇壯ヲ恃ミ、虐暴乱撃、兵刃ヲ振ツテ兵法ナリトシ、何ゾ水浴參玄等ノ苦辛ヲナサンヤ。若シ斯ノ如ンバ、余ガ如キノ至愚、ナンゾ此術ニ與ルコトヲ得ン。先師ノ如キハ、実ニ尊ブベキ者ニアラズヤ。

余、幼ニシテ、機迅流兵法ヲ依田秀復ニ學ブ。其勢法ナル者、臂力振兵、支体堅剛、或ハ大声ヲ発シテ敵ノ氣ヲ奪ハントシ、或ハ敵ノ兵刃ニ打歪シ、或ハ格下シテ勝ヲ得ントシ、殺氣・争氣共ニ熾ンナルヲ要トス。其比較ニ於ルヤ、鉄面箱袍ヲ冒ヒ、暴戾乱撃シテ与ニ争フ外他ナシ。故ニ力大粗壯、雄偉精緻ニシテ、殺氣争氣壯ンナル者ニアラズンバ、勝ヲ全フス事能ハジ。此時、余少年筋力未ダ成ラズ。豈如上ノ丈夫ニ比センヤ。斯ニ於テ大ニ錯リ。晝ハ教場ニ進ンデ衆ト雌雄ヲ争ヒ、又木劍竹鞘ノ重大ナル者ヲ造リ、此ヲ閃振スル事七八百箇、千ニ至ル事夜々怠ラズ。斯ノ如クスル事數年ニシテ、漸ク丈夫ト相持スル事ヲ得タリ。師(有宗)可否セズ、唯屢々呵スルノミ。時ニ余十四歳、是寛政八辰辰年ナリ。熟ラ考ルニ、今師ニ學ブ事七年、師許可セル力大豊偉精強ノ好漢ト稱スルモ、余ト相持ス。況ヤ其他ヲヤ。何ノ恃ム所アツテカ此門ニ學バン。如カジ、辞シ去テ他ニ學バンニハト。終ニ辞シテ、明年中西子啓ノ門閥ニ赴キ、其弟子ト成ラ

鶴林先師「鶴林は号なり。白隠禪師を云。駿州原駅松隠(蔭)寺に住す。明和五戊子年十二月十一日寂す。」(同、註)

僧中の正受老漢 白隠が師中の師と尊敬する人物で、かれがまだまだ慧鷲といつた二十四歳のころ、信州飯山の正受老人(道鏡慧端)のもとに参禅し、其の佛道とは何かを教えられたという。

福氣ノ相 福々しい相、福相。貧相の対。赤身 あかはだか、赤裸。

此術 天真傳。

幼ニシテ 「年八歳、寛政二庚戌年正月廿二日」(註)

機迅流 安永六年(一七七七)、依田新八郎秀復の創始。秀復は米沢の人、はじめ桶流居合を修め、さらに宝蔵院流槍術を学んで精妙を得、一流を立てた。丹波篠山青山侯に仕う。暴戻乱撃 あらあらしく激しく打ち合うこと。

相持スル 対等に打ち合う、試合する。

阿スル 詞る、叱る。

門闢 闢は門の敷居。

弟子トナラン 「寛政九丁巳年正月十六日。」

五年 「十五歳ヨリ十九歳マデ。」(同、註)

符対 符はアフ(合)。合対。互に敵対する。

閃滾 滾は水のさかんに流れる貌。ひらめかし、ふりまわして。

ニシテ符対ノ氣ヲ逃ルム事能ハズ。或ハ刀ヲ振

ツテ敵ノ兵刃ヲ切下シ、又ハ刀ヲ閃滾シテ、刺

衛・斬撃共ニ縦ニセントス。彼ノ威子ガ謂ユ

ル、跪伏、委曲、蛇行、亀息シテ、堂々タル七

尺ノ驅ヲ蔽ヒ、伸縮、進退、神出鬼没シテ以テ

鋒鏑ヲ縦横セントスト云ガ如シ。是又、力大豊

偉、伶俐精緻ナル者ノ精藝ニアラズンバ、其勝

ヲ完スル事能ハジ。故ニ樛弱庸柔ノ小夫ノ如キ

ハ、如カジ其望ヲ断シニハ。然リトイヘドモ余

尚夙夜勉テ止マズ。師ノ門ニ入りテヨリ五年、

邪熱・悪寒・疾痛アリトイヘドモ一日モ其教場

ニ至ラザル事ナク、其勢法・比較撃劔ノ数量、

衆ニ倍セザル事ナシ。夜ハ家に在リテ、木劔竹

鞘數斤ノ重大ナル者ヲ閃滾シ、其風声ヲナサン

ム。母、傍ニ在ツテ其數ヲ算ス。常ニ至テ曰、

息事勿レト。師示教スルニ、挙動疾疾、輕

足便捷、氣息壯ニシテ、四支形體ハ健剛ナラン

事ヲ要スト云テ、天道神氣ノ事ヲ論セス、又衆

ニ異聞アル事ヲ聞カズ。是、師篤行ニシテ、先

ドモ、師弟ニ非ズシテ朋タリキ。先師未ダ、真ニ

貫セズ、禅機真理ヲ撥ツテ、師ト議シテ、疑機

ノ色アリ。其美何レニアル事ヲ知ラズ。余師

ノ示教ヲ聞クニ、耳ニ入ル所ハ唯形勢ノミ。先

師ノ教ヲ聴クニ、形勢真理相半シ、其為ス所

争氣熾ニシテ天ニ純ナルトキハ、其根元ニ徹ス

ルノ事業ヲ見ズ。故ニ余大ニ錯リ了レリ。昔シ

先師有子武ニ学ビシ時、鉄面鞘袍ヲ冒ヒ雜撃比

較スルニ至リ、辞シ去テ谷神傳平常無敵流ヲ学

ビ、老子ノ謂ユル谷神不死是、謂ニ玄牝ト、

玄牝之門是、謂ニ天地ノ根ト、術ヲ学デ、

至道ヲ究ントセシハ、活眼ト云ベシ。余ハ盲迷

ニシテ天地ヲ識ラズ。挙動疾疾、輕足便捷、氣

息壯ニ、四支健剛、兵刃ヲ飛シテ上ハ頸領ヲ斬

リ、下ハ肺肝ヲ決キ、或ハ膊臂ヲ劔削シテ、勝

負ヲ賭トシ、其鋒尖ニ縦横セントス。余斯ノ如

クスレバ、敵復スノ如クス。宛然鬪鷄ノ如シト

イヘドモ、余聊カ其技ヲ得タリキ。時ニ享和元

辛酉二月十七日、師子啓死ス。

余雜技ヲ荷ツテ諸州ニ行脚シ、山水ヲ染ミテ

徒ラニ光陰ヲ費ス事數年、是レ天真ヲ知ラザル

ニ因ル。又文化二乙丑年九月、東都ヲ発シ、京

威子 明代の兵学者、戚繼光の「紀効新書」をさすか。

輕弱 輕は軟、軟弱。

夙夜 朝早くから夜おそくまで。

風声ヲ成ス 風の音を立てる。びゅんびゅんと。

便捷 敏捷、すばやいこと。

四支 支は肢、両手両足。

真二貫セズ 天真を貫徹するには至っていなかった。

禪機眞理ヲ擔ツテ 坐禪問答の際、師家が家人に対して行なう越格の作略を禪機という。

疑機ノ色アリ 意見が一致しなかった。

其美 いずれが正しいか、どうか。

形勢眞理 技法と心法と。

天ニ純ナル則ンバ 眞天を追求することにもつばらな時であつたので。

谷神不死、是謂玄牝、…… 「老子」上篇、

第六章。谷神は谷間の凹地に宿る神靈。一切の万物を生成化育してやまない天地のはたらき、大自然の理法(道)の奥深く幽かなことを、女性の生殖器にたとえて詩的に表現した

草句。自己の小我を否定して、無欲無心、無為自然に帰すべき在り方を示した語。

至道 至極の道、無上の大道。

其技・雜技 白井の自得したという秘術、「八寸ノ伸曲尺」(註)。

一刀流兵法韜袍起源

事六年ニシテ、終ニ其許可ヲ得。又、諸州兵法ノ弟子、總テ三百余人ニ至ル。備藩ノ弟子ハ、日ニ教場ニ來テ擊劍比較ス。余ガ門ニ入ルノ士、各軀命ヲ擲ツテ其技ヲ究ント欲ス。故ニ其得力ナキニ非ズ。師(軍)生質忠恕・温厚ニシテ、深ク余ヲ憐デ、其親族ニ加ヘシヲ以テ、一日弟子數人ト与ニ愚ガ技幕下ノ電覽ヲ蒙リ、又他日、弟子慣習精練ヲ励サン為ニ、雁一羽ヲ愚ニ給リシ事アリキ。(中略)

明年、母東都ニ在リテ大ニ病ス。余ガ姉、羽翰ヲ飛シテ其急ヲ告グ。余此ヲ見テ胸膈キ流汗シテ止マズ。即日備藩ヲ発シ、倍道兼行シテ、東都ニ帰テ是ヲ訪フ。幸ニシテ病即癒ユ。余七年ニシテ郷里ニ帰リ、旧識ヲ訪テ、先師ノ居ニ至ル。師悦テ、余ガ兵法ノ見得底ヲ問フ。余答ルニ所得ヲ以テス。師微笑シテ笑テ曰、數年前ノ是トスル所ハ、今日ノ是トスル所ニアラズ。請フ試ニ是ヲ比セント。余木劍ヲ執テ師ニ対ス。師又然セリ。余徑ニ進ミ急ニ鋒尖ヲ閃烈シテ、師ノ肺肝ニ至ラシメントス。師從容トシテ応ゼズ。忽チ木劍ヲ頭上ニ飛シテ、余ガ全身ヲ蔽フ。支體縮々乎トシテ、手足ノ在所ヲ失ヒ、通身流汗シテ夢ノ如シ。從前ノ苦修、尺寸ノ功ヲ立ザル者ニ似タリ。驚キ感シテ、膝ノ屈スルヲ知ラズ。再拜作礼シテ、師ガ術精妙何ヲ収メテカ、技ノ斯ニ到レル所以ヲ問フ。師曰、見性得悟ノ一念、子ニ在ルノミト。又曰、子故態ノ技ヲ荷ッ

テ四方ニ遊ビ、雜擊比較シ、邪道ヲ修シテ邪念ヲ益セリ。斯ノ如クシテラバ、縱ヒ積テ驢年ヲ重ヌト云ドモ、何ノ用ニカ堪ンヤ。予常ニ憐ム、庶人姦勇ノ師、己レガ邪曲暴戾ヲ説テ、主将ノ明敏良知ヲ穢シ錯ラシムル者ヲト。又粗壯健雄ノ士、竹劍鉄面韜袍ヲ荷ヒ、抗肩驚ノ如ク街路往行シテ威武ヲ衆ニ示シ、至道前後ニ澄ミ湛タルヲ知ラズ。妄想邪念積蓄シテ、犬馬ノ老ヲナス者ヲト。余此言ヲ聞テ、慚汗腋ニ滴ル。謂テ曰、師何ゾ愚ヲ辱ムル事ノ甚キ。今日ヨリシテ師ノ門下ニ伏シテ示教ヲ乞フ。大慈大悲愛憐セヨ。師曰、子ハ誠ニ問フ事ヲ好ノ士ナリ。道ノ為ニ己ヲ捨テ予ニ從フ。何ゾ蘊奧ヲ秘センヤト。日ニ到リテ勇猛精練スレドモ、古ニ謂ユル、一百二十斤ノ重擔ヲ荷ツテ、羊額頭ニ上ルニ異ル事ナシ。故ニ速ニ至道ヲ究ントスルノ道ヲ問フ。師示スニ、專修練丹ノ事ヲ以テセズシテ曰、予ハ幼ヨリ二十余年、邪道ヲ修シ邪法ヲ学ビ、妄念胸ニ充チ邪念支體ニ凝ル。我ニ灌水ノ法アリ。飲酒肉食ヲ禁ジ、日ニ浴シテ怠ラザレバ、其邪念ヲ断ジ、克ク大功ヲ成スト。余意ヘラク、師ハ支體健剛、世禄ニシテ福氣ノ相アリ。故ニ修シ浴シテ以テ至道ヲ究ム。愚ハ軟弱庸柔、常ノ産ナク常ノ心ナク、貧賤ニシテ道ヲ究ント欲ス。師ニ比スベカラズ。死ヲ以テ誓ハズンバ、何ゾ成道スル事ヲ得ン。如カシ、死ストモ修センニハト。是レ二十九歳ノ時ナリ。此レ又大イ

滝川俊章 「万五郎ト云フ、左近将監一益の後裔、当時先隊ノ銃長、軍監役ヲ兼帯ス」(註)。忠恕 まごころとおもいやりのあること。

明年 「文化八年」(註)。

羽輪ヲ飛シテ 急便をもつて。

倍道兼行 足を急がせ昼夜兼行で。

見得底 どんなことを会得してきたのか。

縮々乎 手足が縮かみ身体の自由を失つて。

故態ノ技 以前に習得した技。

驢年 馬齢と同じ。

抗肩 肩をいからせて歩くさま。

犬馬ノ老ヲ成ヌ 犬馬が年をとるように無能で老いること。

懈汗 はずかしさの余り体からふきでる汗。

冷汗三斗。

成道 さとりを聞くこと。悟道。

先師の遺著 白隠禪師の「夜船閑話」「遺羅天釜」などをさす。

元氣自然ニ膺下ニ充実シ…… 「妄想」(註)

の功果つもらば、一身の元氣いつしか腰脚足

心の間に充足して、膺下(膺然たること、未だ

懈打せざる鞞の如けん。)(「夜船閑話」序) 狐

は狐(ふくべ、ひょうたん)。鞞は蹴鞞に使う

まり。

趙州ガ無ノ字 趙州有無の公案、狗子佛性

の話。「從容録」第十八則。趙州は從容禪師。

讚州象頭山 讚岐の金毘羅宮。

ニ錯リ。酒肉ヲ断ジ日々水浴スル事、百箇或ハ

二三百箇。苦熱煩暑ノ朝夕、嚴寒素雪ノ曉、備

藩京撰ニ到ルニ旅邸客舎トイヘドモ、修シ怠ラ

ザル事五年。七日飲食ヲ断テ水浴スル事再タビ、

一ハ備陽ノ瑜伽山ニ於テシ、一ハ茅舎ノ楼上ニ

於テス。未ダ成功ヲ見ズシテ、終ニ元氣虚損シ

テ、難治ノ病症ヲ発シ、針灸薬施スニ効驗ヲ見

ズ。母悲歎シ、遮テ水浴ヲ停シ事ヲ乞フ。親族

挙テ止ム。故ニ灌水ヲ去テ、専修練丹ノ法ニ改

ム。此レ文化十二乙亥年正月十八日ノ事ニシテ、

三十三歳ノ時ナリ。余元ヨリ鶴林先師ノ遺書幾

バク巻ヲ閲シ、又師ノ示教ヲ受テ、練丹ノ功ア

ル事ヲ知ルトイヘドモ、水浴修法ノ艱辛ヲ待テ、

練丹ニ懈ル事有ガ如シ。今ヤ灌水ノ修法ヲ廃ス、

故ニ練丹ノ外専修ノ法ヲ知ラズ。此ニ於テ、神

ヲ煥シ、或ハ称名練丹シ、或ハ誦經練丹シ、

或ハ擊劍練丹シ、鶴林先師ガ謂ニル塵務繁絮ノ

間、進退揖讓ノ席ニ於テモ、片時モ放退セザラ

ン事ヲ勉テ止マザル事僅ニ二月、元氣自然ニ膺

下ニ充実シ、狐然タル事未ダ懈打セザル鞞ノ如

ク、病症イツシカ氷消シ、聊カ功力ヲ得タリ。

當ニ知ル、鶴林先師ガ専修練丹ハ捷徑ニシテ、

灌水修法ノ功少キ事ヲ。

師ハ練丹怠ラザレドモ、尚灌水ヲ可トシテ修

シテ止マズ。故ニ余是ヲ告グル事能ハズ。屢々

師ノ健壯ナル事ヲ恐ル。一日、師ト共ニ円應禪

林ニ到リ、師鐘鼓ノ声ヲ聞テ曰、子此ヲ聞ケド

モ、雙者ノ如クスル事ヲ得ルヤト。余、擬議シ

テ答ル事能ハズ。師復問フ時ニ、始テ真空此ヲ

包ムノ機ヲ得テ、以テ答フ。師、可トス。他日

師又問フ。趙州ガ無ノ字、子ガ見得底如何ト。

余曰、天地間ニ充塞スト。師笑テ曰、子ガ言既

ニ可ナリ、其技未ダ不可ナリ。子ガ舌唇、支體

ニ先ジ生ズル事数年ト。後、師余ガ技ヲ許可セ

ントス。余、其不可ナルヲ以テ固辞ス。師謂テ

止マズ、終ニ許可ヲ受クルノ約ヲナス。暮春二十

一日 師ト共ニ東都ヲ発シ、讚州象頭山及藝州岐

島ニ詣ツ。師七十二歳、旅中更ニ輿スル事ナシ。

師ハ速ニ東都ニ還リ、余ハ備藩ニ止ル事二月ニ

シテ郷里ニ帰リ、師ニ謁ス。其ノ君侯浪花大城

總督府ノ任ヲ蒙リ、台命ノ忝キヲ拜シテ既ニ駕

ヲ発セントス。師モ亦女君旅中衛護ノ職ヲ受テ、

其旅粧ヲ募ル。余、日ニ到リテ示教ヲ乞フ。一

日師ト勢法ヲ比ス。余、真空ニ參ジテ支體ヲ忘

ル。師謂テ曰、子ガ技已ニ道ヲ成セリ。予浪花

ニ死ストモ、其道統ヲ絶スル事ナシト。此ニ於

テ、師ノ許可ヲ受ル事ヲ得タリ。是、文化十二

乙亥年八月十五日ノ事ナリ。師、日アラズシテ

東都ヲ発シ、浪花ニ到ル。

是ヨリシテ、余独リ練丹シテ、真空ヲ擬サン

トスレドモ、其真空イマダ実セズ。師常ニ示教

スルニ、練丹天真ヲ以テシ、又兵ハ詭道ナリ、

賊起ルトキハ聖者モ已ム事ヲ得ズシテ是ヲ行

フ。技モ又然リトテ、敵ニ示スニ虚ヲ以テシ、

其君侯、浪花大城総督府の任を蒙り、藩主松平右京大夫、文化十二年（一八一五）四月廿九日、御奏者番兼寺社奉行より大坂城代に任ず。文政五年（一八二二）六月朔日、辞任。真空の突する、心気が充実する。

明道論及神妙録、天真録、この三書は白井平が三十六歳のときの著述。「兵法未知志留辺」は五十一歳（天保八年）のとき。

知者不知、知者不知、「老子」下篇、第五十六章。忘言忘知の境地、すなわち無心でこそ道との合一が実現される。

多言数窮、不如守中、「老子」上篇第五章。中、すなわち冲虚。虚静な態度を守ることが、最上の処世術である。

空鈍、小出切一雲。含「晚翠」冬枯れの木々の間にあって、いきいきとした緑をたたえている。

期年、一年のうちに。豁然貫通、「大学」伝第五章。格物致知につ

いての朱子の補傳。「所謂致知、在格物、物者、……至、於用力之久、而一旦豁然貫通焉、則衆物之表裏精粗無不到、而吾心之全体大用無不明。此謂之物格也、此謂之知至也。」豁然貫通とは、例え

ば、巨木を斧で一打ち一打ち切り込んでいく、最後の一撃をもって、ものの見事にこれを切り倒すのと同じようなものだ。

敵ヲ誘クニ利ヲ以テス。余此レニ膠固シテ其技ヲ行ント欲シ、敵ニ対シ其争競ノ氣熾ナルヲ見テ、忽チ真空ヲ失ヒ、心ニ雜撃暴戻ヲ嫌ヒ、技ハ雜撃暴戻ニ至ラントス。故ニ、実ノ亂撃暴戻ノ為ニ蔽ハレントスル者數次、時ニ至テ、余幼ヨリ嗜ムノ邪念忽チ競ヒ起ツテ、已ニ木劍ヲ飛シテ打斃サントスルノ邪勢ヲ發ス。人其惡念ヲ察シテ、其技ヲ止ム。余退テ獨其惡業邪念滅セザル者ト、彼ノ威子ガ謂ユル、到三廩打時忘テ了、拿法ヲ言ニ合スル事ヲ慚ヅ。此ニ於テ又慙愧懺悔シテ、神ヲ凝シ、練丹自強シ、參シ參ジテ、終ニ聊カ真空ノ実スル事ヲ得。余蒙迷ニシテ、先師道統ノ書ヲ講ズル事能ハズ。故ニ弟子ノ為ニ、此明道論及神妙録、天真録ヲ記セリ。借餘ノ罪逃ル、事能ハズ。余獨リ其罪ヲ負テ、後学ノ士ノ惑ハザラン事ヲ要ス。老子曰、知者不知、言者不知、又、多言、數窮、不如守中、ノ言ニ拘泥シテ、獨リ其道ヲ樂ミ、人口ノ喧シキヲ厭テ、何ゾ此道ノ絶スルヲ待ンヤ。假令、師英豪ノ材ヲ具ストモ、鶴林先師・東嶺ガ如キノ名師ニ學バズンバ、何ゾ此道ヲ得テ兵法ニ加ヘン。空鈍兵法ノ所得ヲ讀スルトキハ、古今兵法ナキニ似タリトイヘド、練丹ノ術ヲ識ラザレバ、古今鶴林先師ノ如クナルヲ聞カズ。老子曰、聖人爲、腹不爲目、又、虚其心、實其腹、ト云ノ言ニ合ス。兵法ニ於テ此ヲ修シテ其奇功ヲ得ル事、勝テ云ベカラズ。

時ニ師、浪花ニ止ル事八年ニシテ、文政四辛巳年九月、東都ニ還ル。其居ニ到テ其技ヲ比スルニ、益進ミ愈妙ニシテ、余ガ及ベキ所ニアラズ。此時師、年七十七歳、古今希有ノ老翁ト云ベシ。此レ謂ユル、遅々タル洞畔ノ松、鬱々シテ含ニ晚翠、ト云ニアラズヤ。又、余ガ著スノ記三卷ヲ持シテ師ニ示シ、弟子ニ教フルニ此書ヲ以テセン事ヲ乞フ。師、可トシテ後、存スル事五年、文政八乙酉年八月朔日、天然ヲ以テ終ル。行年八十一歳。死ニ至ル迄、灌水専修怠ル事ナシ。衆人其健壯ヲ稱ス。余恐ル、師ガ従前実事ヲ以テスルヲ、後人師ニ黨ストセン事ヲ。今ヤ師ガ知己尚存ス。師死シテ九年、何ノ追従ニカ、虚事ヲ記シテ、衆人ノ侮ヲ受ンヤ。師慈孫ヲ養テ子トス。其技精緻、余ガ及ベキニアラズトイヘドモ、師没シテ後、期年ニシテ又死ス。嗚呼、命ナルカナ。其道統已ニ絶ナントス。幸ニシテ、余師ガ道ノ一毫ヲ存ス。今師ガ弟子余ガ技ヲ以テ、師ノ道ニ違フト云者アリト。天道一ナリトイヘドモ、其氣稟ニ因テ、僅カニ其畔ヲ異ニス。孟柯氏、善ヲ養フ吾ガ浩然之氣。

此尊卑違フトイヘドモ、余ガ技練丹シテ真空ヲ養フト一ナリ。朱文公、豁然貫通ヲ以テ一家ヲ立ツ。豁然貫通トハ、大悟ノ義ナリ。（下略）